パーラー公民館の3年間

2017－2019

NPO法人地域サポートわかさ

はじめに

移動式屋台型公民館「パーラー公民館」の
3年間の活動が終了しました。
パーラー公民館は、新たな公民館のかたちを探る一つの実験でした。
この3年間、その成果を地域のみなさんに引き継ぎ、
また多くの方と共有するため、
日々の活動を発信するブログ記事や「1分動画」、
小冊子『人が集まりたくなる場のつくり方とそだて方』など、
記録活動と情報発信に力を入れてきました。
本書はその集大成として、本事業に関わったさまざまな人の声を集め、
パーラー公民館の3年間を振り返るものです。
こうした取り組みをしてみたいと考えている方々にとって
実践に役立つことも目指しました。
本書が各地での取り組みの一助となれば幸いです。

最後になりますが、3年間にわたる本事業では、
本当に多くのみなさまにご協力いただきました。
この場を借りて御礼を申し上げます。

NPO法人地域サポートわかさ

目次

1　はじめに
3　パーラー公民館とは？
6　かけ足で巡る！ パーラー公民館の3年間

7　1章　新しい公民館をつくろう
8　社会教育のアート的展開　宮城 潤
11　曙に公民館がほしい！　上原美智子
14　「共有空間」としてのパーラー公民館　小山田 徹

17　2章　絵解き！ パーラー公民館
1. パーラー公民館はこんなところにあるよ！
2. パーラー公民館にある「もの」
3. パーラー公民館にいる「ひと」
4. パーラー公民館を伝える・残す
5. パーラー公民館のワークショップ
［番外編］おでかけパーラー公民館

33　3章　公園にパラソルが広がるとき
34　現場から見たパーラー公民館の「つどう」「まなぶ」「むすぶ」
佐藤純子＋平良亜弥（聞き手：大澤寅雄）
41　パーラー公民館の体験レポート
上村忠男／森 隆一郎／古賀桃子／金城 聡／野嶋京登
46　地域から見た、パーラー公民館
玉代勢 藍／吉田 修／仲程あや子／玉寄文代／安里尊之

51　［巻末付録］評価検証報告
教えて、寅さん！ パーラー公民館ってなんだったの？

55　パーラー公民館の活動記録 2017-2019

パーラー公民館とは？

大きな白いパラソルと、黒板テーブルが特徴の、
移動式屋台型公民館です。
沖縄県那覇市曙にある「あけぼの公園」を中心に、
2017年より3年間、開館しました。
通常開館のほか、月1回の講師を招いた
ワークショップやイベントなども開催。
開放感にあふれ、ちょっと懐かしい感じもする青空公民館です。

館長：上原美智子／副館長：南信乃介／職員：佐藤純子、平良亜弥／用務員：宮城潤
設計・監修：小山田徹／制作：High Times、うえのいだ

パーラー公民館の6つのアクション

Action1:「つどう・まなぶ・むすぶ」

公民館の社会的な機能は「つどう・まなぶ・むすぶ」。人々が集い、自らの関心に基づき学び合いながら、さまざまな人や機関・団体と結びつき、自らの活動で生活を豊かにしていく。施設がなくても、公民館本来の機能を担うことを試みました。

Action 2:集うための「場づくり」

誰もが集える場づくりを重視しました。目指したのは、何もしなくてもそこにいることができる場。外から見えるオープンさや、入りやすさだけではなく抜けやすさを大事に、風通しの良い場づくりを心がけました。

Action 3:「アート」が生み出す変化

3年間でたくさんのアーティストに関わってもらいました。アートは、空間や場、また人と人との関係性を変えることがあります。パラソルと黒板テーブルの設えも、アーティストが考案したもの。それだけでいつもの公園が違って見えました。

Action 4:スタッフは「何もしない」

パーラー公民館は、「何もしない」がキーワード。その代わり、地域の方々の話をよく聞くことを心がけました。パーラー公民館の主役は、地域の人たち。スタッフは集まった人の話を聞き、住民ニーズの掘り起こしをはかりました。

Action 5:「二つの時間」のコントラスト

アーティストやアートNPOが開発した、アート・ワークショップを定期的に開催しました。通常開館の「何もしない」日常と、ワークショップの非日常、この二つの時間のコントラストを大事にしました。

Action 6:たくさんの「結び目」を生み出す

まちづくり協議会やPTA、NPOなどの地域団体、子ども食堂や福祉団体、就労支援団体といった専門機関との連携を意識しました。パーラー公民館が結び目（結節点）となって、ここで生まれたアイデアやニーズをかたちにしていくことを目指しました。

「パーラー」とは？……沖縄のまちなかで見かける路上簡易店舗のこと。テーブルやイスがあり、気軽に立ち寄り、買ったその場で飲食できるパーラースタイルは、沖縄文化の一つ。パーラー公民館のスタート当初は「何が買えるの？」とやってくる大人や子どもたちもいました。

かけ足で巡る!

パーラー公民館の3年間

2017年8月にオープンしたパーラー公民館。
毎年、夏から冬にかけて月に数回開館する期間限定の公民館がたどった軌跡。

2017年度

開館期間は8月〜12月、通常開館は週2日、ワークショップやイベントは月1回開催。

8月

パーラー公民館 オープン。地域や学校関係者などが大勢来館。

9月

来館者がだんだんと増え、自主講座も生まれた。

10月

イベント満載。「うみそら上映会」と「ちょこっと☆ハロウィン」はその後の恒例企画に。

12月

パーラー公民館の活動の様子が新聞のお正月特別号の表紙に。

2018年度

開館期間は6月〜12月、通常開館は月3日、ワークショップやイベントは月1回開催。

7月

パーラー公民館が企業のCMに起用される。撮影会は大盛り上がり。

8月

移動式情報センター「ZINE KIOSK」オープン！　ZINEづくりワークショップも開催。

9月

「おでかけパーラー公民館」スタート。ご近所の取り組みにおでかけ。さらに石垣市まで。

2019年度

開館期間は7月〜12月、2018年と同様のペースで開館。

7月

パーラー公民館、大盛況。海外や全国、地域の常連さんまで100名以上が来訪する日も。

9月

那覇市内の緑ヶ丘公園でもパーラー公民館がスタート。

2020年1月

3年間の振り返りとこれからを考える「パーラー公民館祭り！」を開催。

1章 新しい公民館をつくろう

「これまでにないものをつくる」。パーラー公民館の誕生に深く関わった3人の言葉から、新しい公民館への思いや背景を探る。

新しい公民館をつくろう

社会教育のアート的展開

宮城 潤
［若狭公民館 館長／パーラー公民館 用務員］

アートと社会教育、異なる領域を歩むことで
見えてきた公民館の社会的意義や可能性。
企画者の宮城潤にとって、パーラー公民館は住民の声に応えるとともに、
これからの公民館のかたちを探る試みでもあった。
パーラー公民館に至る問題意識と現場から見えてきたものとは。

すべてはここから始まった

2015年、子どもの学習支援や居場所づくり、多世代交流の地域づくりを目的に、「曙小学校区まちづくり協議会」が立ち上がった。定例会に顔を出した際に聞こえてきたのが、「曙にも公民館がほしい」という声だった。公民館の設置は、国の定めた努力義務があるものの、那覇市は生活圏に公民館のない地域も多く、曙は最寄りの若狭公民館まで徒歩1時間以上と離れていた。

若狭公民館長である私は、代替案として出前講座を提案したが、会議での反応は消極的だった。気軽に集える施設が必要なのかとも考えたが、曙小学校のミーティングルームが、すでにその機能を果たしており、手話ダンスサークルや、社会福祉協議会のふれあいデイサービスが行われていた。では、「公民館がほしい」とは、一体どういうことなのだろう。

公民館とは何か

公民館は戦後、民主主義による新たな国づくり、地域づくりの機関として構想され、1949年の社会教育法制定により法的に位置づけられた。住民自ら知識や技能を習得し、生活の問題の解決と向上を目指す、その中核施設として、公民館は全国各地に広がっていった。高度経済成長期には、生活の安定が図られ、人々の関心が生活課題から余暇や健康に移り、公民館は、趣味やレクリエーションの場となっていった。公民館と聞いてイメージする姿は、この頃にでき上がったものである。

だが、地域コミュニティの弱体化が進み、社会課題が複雑化する現代社会において、公民館に求められる役割もおのずと変化しているはずだ。つまり、「公民館がほしい」という住民からの投げかけは、公民館の存在意義に関わる問いなのである。

前島アートセンターの経験から

若狭公民館の対象区域に、前島という地域がある。戦後、港に隣接する歓楽街として栄えたまちだ。たまたまそこに居合わせた高校生が、暴力団抗争に巻き込まれ犠牲となる痛ましい事件があった。1990年のことである。事件の影響から客足が遠のき、徐々にまちが衰退していった。

空き店舗が目立つ前島のビルの一角を拠点に、2001年、NPO前島アートセンターが活動を始めることになった。活気を失って久しいまちと、沖縄のアートシーンの活性化を目指し、アーティストをはじめとする、さまざまな専門家や市民と協働で展覧会やワークショップを矢継ぎ早に展開していった。その活動は時流にのり、全国的に注目されるようになった。空きテナントだらけだったビルは、次第に音楽や演劇の拠点となり、近隣にも若者がお店を開くなど、まちの賑わいを取り戻しつつあった。しかし、手応えを感じていた矢先、ビルの閉鎖を機に、10年間の前島アートセンターの活動に幕を下ろすことになった。

そうして「施設」を失うと、そこに集っていた人はバラバラになり、そこでの賑わいも時間とともに忘れられていった。しかし、施設がなくなっても残ったものもある。前島三丁目自治会と協働して復活させたお祭りが、夏の恒例行事として定着し、今も続いているのだ。

パーラー公民館という実践

この経験から私は、「施設」の可能性と限界を学んだ。施設にできることは間違いなく多い。しかし、ただ施設があれば良い、ということではない。人々が、自発的に関われる仕組みや工夫こそが重要なのだと。公民館は、しばしば「めだかの学校」に例えられる。誰が生徒か先生かわからない。学校教育とは異なり、多様な背景を持った人々が「集い」、知恵や情報を交換して「学び合い」、互いの活動を「結び合わせ」ながら生活を豊かにしていく。それが社会教育機関としての公民館の使命だ。

曙の人々が求める公民館像とは、多様

ワークショップ「あけぼののうたをつくろう」（講師：鶴見幸代）の様子

な世代の住民が交わり、ともに活動できる機会、つまりは、公民館の本来の機能である「つどう・まなぶ・むすぶ」ではないか。戦後すぐ、広場に「青空公民館」が生まれ、そこに人々が集った話が頭をよぎる。私たちには施設をつくることはできないが、青空公民館のような人が集う場をつくることはできるかもしれない。そうして、移動式屋台型公民館「パーラー公民館」の構想が固まっていった。

パーラー公民館の設計と監修に、美術家の小山田徹さんをお招きした。「対話の場」を生み出す、稀有なアーティストだ。パラソルと黒板テーブルを広げるだけのシンプルなパーラー公民館だが、パーラー公民館を開くと、いつもの公園がちょっとだけ違ってみえた。つまり、公園という場が持っている意味を変容させたのだ。

そこでは、職員にはできるだけ「何もしない」よう心がけてもらった。もちろん、本当に「何もしない」わけではない。そこに居合わせた人に耳を傾け、そこから「語り」を引き出していく。語りは、まちの歴史から公園の清掃問題まで、地域に関心を寄せる人たちの想いにあふれていた。その語りの蓄積から、地域のニーズが見えてきた。

普段は何もしないパーラー公民館だが、時折、アーティストが開発したワークショップに取り組んだ。ユニークで創造性に富んだワークショップは、地域の人々の創造力を刺激し、地域にさまざまな気づきをもたらした。

静と動を使い分けた取り組みは功を奏し、それぞれの場面に協働してくれるパートナーが現れた。パーラー公民館がなくても、地域の自発的な活動が継続していく手応えを感じるまでに、そう時間はかからなかった。

目まぐるしく変わるこの変化の時代に、多様な人々がともに学び合い、協働して地域社会をつくることが必要だ。パーラー公民館は、アートの力を得て、社会教育の実践の場として公民館の存在意義を改めて示すことに貢献できたと思う。

みやぎ・じゅん
那覇市若狭公民館館長、パーラー公民館用務員。2001年にNPO法人前島アートセンター設立に参画（初代理事長、2011年解散）。2006年から、体制移行に伴う4度の職名変更を経ながら若狭公民館勤務14年目。「第70回優良公民館表彰」（文部科学省）において、最優秀館に選ばれる。文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員。

新しい公民館をつくろう

曙に公民館がほしい！

上原美智子
［パーラー公民館館長／曙願寿会会長／曙小学校区まちづくり協議会名誉会長］

「曙に公民館がほしい！」。そう声をあげたのが、曙で元旦を除く364日、毎朝欠かさずラジオ体操を続ける曙願寿会（あけぼのがんじゅうかい）会長の上原美智子さん。3年間パーラー公民館館長を務めた上原さんから見る、このまちの歴史とパーラー公民館の可能性とは。

公民館がほしい！

曙は埋め立てによって生まれた新しいまちです。宮古島、八重山諸島、本島北部の山原（やんばる）、それと県外などから、人々が寄り集まりました。私は、生まれは糸満（いとまん）市で、1960年代末頃移住してきました。曙に住んで約50年になりますね。

曙には、公的な施設がなく、1990年に念願が叶って曙小学校が開校し、地域に開かれた学校として、ミーティングルームや校庭が集会場の役割を担ってきました。毎朝ラジオ体操をしている曙願寿会の活動も、小学校の校庭を使わせてもらっています。しかし、気軽にみんなが集まれる場所がありません。実は、私は教員退職後の数年間、若狭公民館の社会教育指導員を務めていましてね、そういう経緯もあって「公民館が近くにほしい！」と思っていたんですよ。「言ったってどうにもならんさー」という声もありました。行政から小学校の一角を改装して公民館にするのはどうか、という提案もありましたが、実を結ばない。私にとって埋立てたばかりの頃から様子を知っているから、曙は自分のまちなんです。住んでいるみなさんと、ここで生まれ育った若いみなさんともいっしょにこのまちの歴史をつくらんといかん、という想いがあって公民館が必要だと思っていたんです。

みんなが集まる場所を自分たちでつくる

パーラー公民館の構想を聞いたとき、施設はないけれども居場所ができると思い、自分が考えていたことにちょっぴり明るい兆しが見えて、本当に嬉しかった

パーラー公民館にはさまざまな年齢層の人が集まる。写真右は上原美智子

です。また館長にも任命されて、健康で長生きして良かったととても喜びました。

戦後にムラヤーというのがありましてね、女性たちが各集落ごとに、みんなが集まる場所を自分たちでつくったんです。沖縄の戦後は、ないないづくしの焼け野原でした。私は幼少でしたが、各家庭からすすきや材木を持ち寄り、茅葺きの小屋を建て、呼びかけなくても、女性は皆ムラヤーに集まってね。私もムラヤーで、米軍のゴミ捨て場から拾ってきたコカコーラの瓶を自分たちで切ってコップにリサイクルしたり、拾ってきた落下傘を洗濯して、ベビー帽子やベビー服をつくったりしましたよ。味噌をつくったり、ナーベラー（へちま）やカンダバー（芋の葉）を使った料理のつくり方を教えあったり。今はスーパーに行けば何でも買えるけど、当時は生きるためには自分たちで何でもつくらなければいけませんでした。かまども自分たちでつくりましたね。そうやって戦後を生きてきたんです。

いつの間にか知人になり仲間意識が生まれていく

パーラー公民館は、パラソルの下で子どもたちが異年齢で遊んだり、宿題を教え合ったり、絵を描いたり、子どもからお年寄りまでゆんたく（おしゃべり）して集まる憩いの場となりました。

子どもたちとまち歩きをして歴史的な場所を訪れたり、まちの歴史を語る企画など、いろんなワークショップを通して、曙というまちにさらに愛着を感じるようになりました。

高齢になると家に閉じこもりがちで、ちょっとした外出も遠のきますが、コミュニケーションがとれる場ができたと思いますよ。子どもたちにとっても、安心して遊べる場になっていて、とても楽しみにしていたのが伝わってきました。

最初はテーマもなくてどんなことができるんだろうという抵抗もありました。でも、人が集まればね、何かしらのヒントが得られるし、それがパーラー公民館の意図する目的だったんだなと思います。あけぼの公園に白い大きなパラソルを立てると、普段は素通りするところが、「ぬーそーがー（何してるかね）」と会話が自然に生まれます。義務ではなく、非常に自由な雰囲気のパーラー公民館を介して、いろいろな話が自然とできたし、自主的な協力につながったと思いますよ。それが、パーラー公民館の大きな成果だったんじゃないかと感じます。

［インタビュー：佐藤純子、平良亜弥／構成：坂田太郎］

うえはら・みちこ
1935年沖縄県糸満市生まれ。1960年代末に曙に移住。沖縄県教職員、沖縄県教育庁社会教育主事を退職後、若狭公民館で社会教育指導員を務める。健康管理のために地域住民とラジオ体操を始め、2002年に「曙願寿会」を発足。現在も「地域の健康は地域で守ろう！」と多くの仲間と元旦を除く364日毎朝活動している。

1：ワークショップ「あちゃ〜ぬ地図ゆ」まち歩きにて、子どもたちに説明する上原／2：通常開館時のゆんたく（おしゃべり）の様子／3：「あけぼの公園かんしゃ祭」／4：子ども食堂も不定期で差し入れに訪れた。写真はイベント「ちょこっと☆ハロウィン」にて

新しい公民館をつくろう

「共有空間」としてのパーラー公民館

小山田 徹
［美術家／パーラー公民館 設計・監修］

パーラー公民館の特徴の一つは、
アーティストがその計画に大きく関与したことだ。
「共有空間」をテーマに活動を続けてきた美術家の小山田徹さんに、
多様性が生み出される場づくりとパーラー公民館での展開を聞いた。

共有空間の獲得

美術家として、時々大工、バーのマスターや大学の先生として、「共有空間」と呼ばれる人々が集まる場所や時間をつくる活動をしてきました。もともと私は、ダムタイプというパフォーマンスグループに参加していました。メンバーの一人がHIVに感染したことで、エイズを巡る差別の問題やさまざまな軋轢（あつれき）を知り、そんな社会を変えたいと、みんなで勉強会やアクションを行いました。ただ同時に社会的問題の解消には、個人と個人の時間をかけた対話の必要性を痛感し、新たな対話の方法や場を創造しようと、今に至ります。「共有空間」とは、自立的に人々が出会い、交流・交歓する場。場があるだけで、自然と多様な関係性や活動が生まれたり、世代を超えて価値観が共有、伝承発展するような、社会の営みが行われる場所や時間です。少し硬い言葉ですが。

これまでカフェや屋台、作業小屋などの試みをしてきましたが、最強の「共有空間」は焚き火なんです。火を前にすると、不思議と見知らぬ人同士が自己紹介なしで話し始め、子どもも勝手に遊びます。食べ物のシェアも当たり前に起こり、自立的な場がすぐに生まれます。特に都会では、そうした関係が生まれる余地が吹き飛ばされ、誰もが個人でしかいられなかったりする。さらにここで共有しなさい、くつろぎなさいと制度側から「共有空間」が与えられるような世の中になってしまっている気がします。そういうのは嫌なんです。例えば、わざと人手のかかるデザインにして、多くの人でペンキを塗る、家具をつくる状況をつくります。ペンキを一カ所塗るだけでも、人は空間に愛着を持ち獲得感を得ます。獲得感を得られる工夫はとても重要で、それが場を自立的にしていくんですよね。

ただいるだけでいい場所

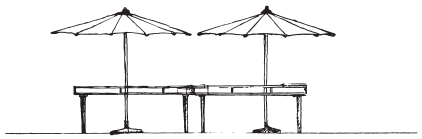
今回、パーラー公民館の計画段階で声をかけられ、参加しました。若狭公民館のみなさんと話したことは、公民館といっても、ワークショップを毎回開催するとか、技術や知識を提供する場ではなく、ただいるだけでいいという場や状態をどうやったらつくれるか、というものでした。モバイル性も考え、今回はパラソルという一つ傘の下に人が出たり入ったりして、集まりやすい場所という企画の骨子をつくりました。

曙小学校に伺い、校長先生や学校を拠点に地域活動をする方々にお話を伺ったときに、「ああ、学校が傘なんだ」と感じました。学校が地域を見守っている。この傘的な状態を、ほかの場所でもできたらいいなと。周囲の公園を見て回ると、学校近くのガジュマルの木がある「あけぼの公園」が印象に残りました。学校近くの大きな木の下に、白いパラソルが立つ。その中で地域の子どもたちが、大人たちが出会いお互いに存在確認ができる、そんな「風景」がこの地域に当たり前に存在している、そんな状態が生まれるといいなと思いました。

ブリコラージュと人の存在

ありものを組み合わせて新しい道具や機能を生み出すことを「ブリコラージュ」と言うんだけど、大人も子どももその能力が失われつつあるのが現代じゃないかな。だからこそ集まった子たちの経験は重要で、パーラー公民館では、子どもたちがパラソルを立てるのを手伝ったり、大人が用意したことも違う遊びに変えて、勝手に遊びを開発しているところは、めちゃめちゃいいよね。黒板テーブルで計算式を書いて勉強していたり、何か誘発するものがあるんだろうね。

大切だなと感じたのは人の存在。完璧な空間や制度はなくて、受け入れ側、参加側、一人、二人の良き人がいないと残念ながらパーラー公民館は回らない。スタッフの佐藤純子さん、平良亜弥さん、そして上原美智子館長の存在が、空気のように馴染んで、場の可能性を広げていたと思いました。パーラー公民館のポリシーである「何もしない」って大変なんですよ。最近、人の話を聞く仕事の重要性を痛感してます。聞く技術をお互いに磨き合わないと、場も地域も成り立たな



©Toru Koyamada

小山田徹によるパーラー公民館のスケッチ

ワークショップ「さかさまBOX」にて

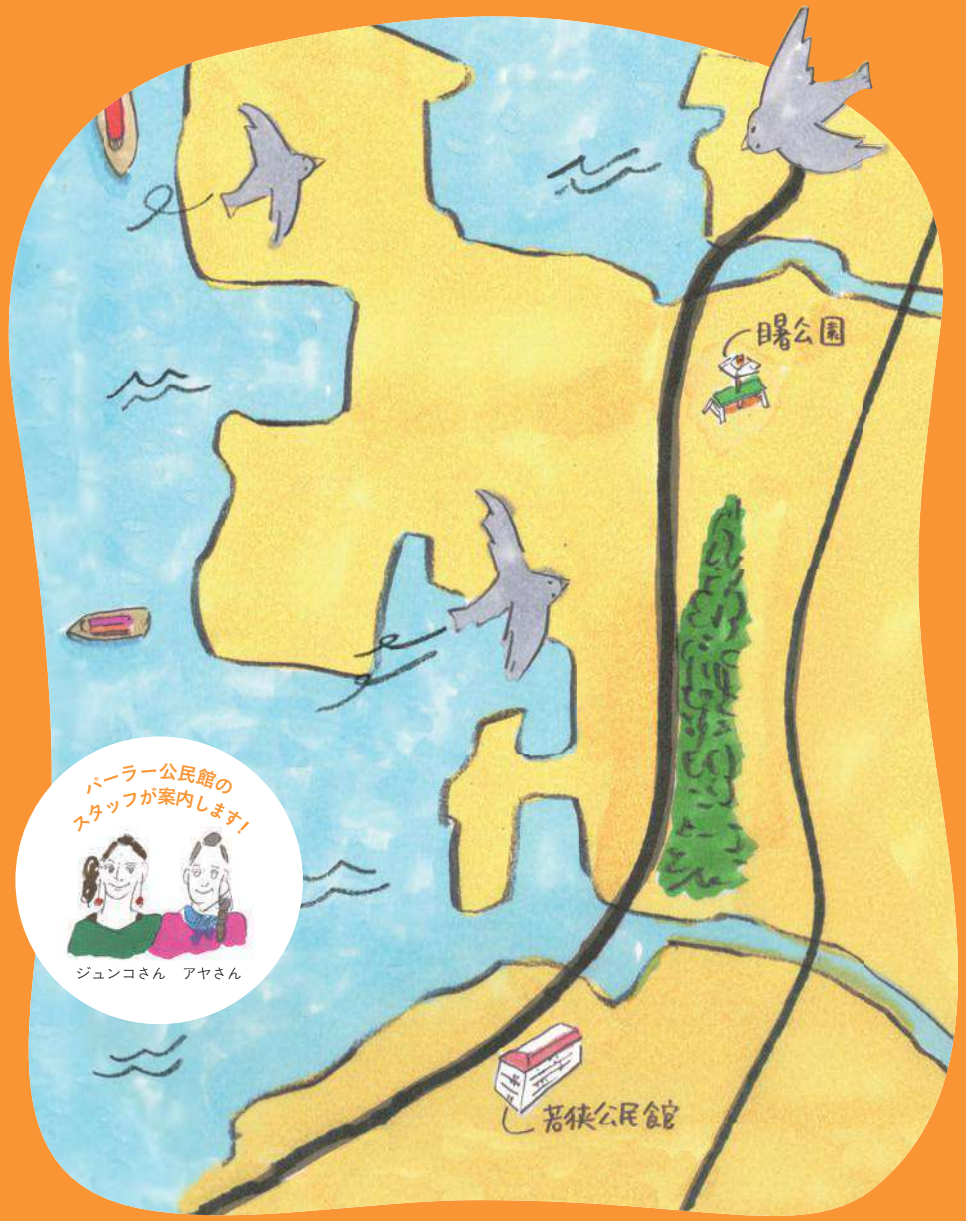
いはずで、今回上手くいったのはそれができる人がいたから。子どもたちが特別感なく「ただいま」ってやってくる感じや、私がよそから来てワークショップをしても、子どもたちの自由さが発揮される感じは、それを引き受ける土壌があるから。安心感がありました。普段は計画通りに終わる感じがするんだけど、曙の子どもたちのわちゃわちゃ感、独特のパワーが発揮される感じからは学ぶことが多かったかな。実は美術を通した教育プログラムが本当につくりたいものの一つは、そういった子どもたちの手に負えない感じじゃないかと思ったんですよ。

アートの役割

アートは基本的に「翻訳行為」だと考えています。違う世界や新しい知識などを、誰かに届くかたちに変える。例えば、自然を美しいと感じたら、伝わるような言語に翻訳して、他者に伝えるという役割。パーラー公民館では、人が自然と集まること、みんなでしゃべることが楽しい。そうした基本的だけど大事な感覚やある種の価値を、子どもたちや地域の方々に伝え、共有するためにアートがちょっと手助けしている、そんなところかなと。開始から3年が経ち、お年寄りがいて、子どもたちがいて、何があるわけではないけれど、うまく回っている感じがあり、これがいい「風景」であることを多くの方と共有したいですね。

［インタビュー：佐藤純子、平良亜弥／構成：坂田太郎］

こやまだ・とおる
1961年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学日本画科卒業。1998年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。平行して「風景収集狂舎」の名でさまざまなコミュニティ、共有空間の開発を行い、現在に至る。洞窟探検グループ「Com-pass Caving Unit」、「対話工房」メンバー。京都市立芸術大学教授。パーラー公民館では監修・設計を担当。



2章 絵解き！ パーラー公民館

公園にパラソルを立てて公民館!?「曙にも公民館がほしい！」
そんな声から生まれたパーラー公民館に詰め込んだアイデアやこだわりとは。

1 パーラー公民館はこんなところにあるよ！

パーラー公民館は、那覇市北西部の曙にある「あけぼの公園」で始まりました。あけぼの公園は、人の暮らしとともにある小さな公園です。この公園を選んだのには、いくつかの理由がありました。

担当者より

「曙にも公民館がほしい」という声が聞こえてきて、公民館に最適な場所をいろいろと探したときにあがったのがこの公園でした。屋外なので外から活動が見える。小さな公園なので公園全体が見渡せる。さらに住宅街にあるので「この場所なら人が集まって来やすいかもしれない」と、この場所に決めました。（宮城潤）

★イベントに協力してくれた人たち

ハロウィンのイベントに参加。近所の飲食店の子どもたちはパーラー公民館の常連さん。

小学校

曙の活動拠点〈那覇市立曙小学校〉。雨天時はここで開館。パラソルや机もここに保管。

こども園、児童クラブ

隣接する〈曙こども園〉と〈曙児童クラブ〉。子どもたちはパーラー公民館の常連さん。

あけぼの公園

パーラー公民館の拠点。

神社

古くからある海の守り神〈恵比寿神社〉。

保育園

近くの〈グッピー保育園〉では、子育てなどについておしゃべりする「ゆんたく会」を開催。

昔の海岸線

曙は1970年代に港の開発によってできた住宅地。かつては、この海岸線より西側は海でした。

那覇新港は、大小の貨物船や長距離フェリーなどが発着する大型の港です。このまちは大部分が埋立てではあるけれど、神社や湧き水のあとが残っていたりと昔の風景が残るおもしろい地域だと感じました。（アヤさん）

寺

地域の歌をつくるワークショップ（p. 31）で、歌詞として登場した〈臨海寺（りんかいじ）〉。

自治会事務所
（子ども食堂の活動拠点）

おでかけパーラー公民館の訪問先の一つ。曙の子ども食堂の拠点でもあります。

あけぼの公園の周辺には、小学校、児童クラブ、保育園、こども園などがあって、たくさんの子どもたちが遊びに来ます。毎年開催しているハロウィンのイベントは、PTAやまちづくり協議会、近くの店舗の協力もあって200人越えの大イベントです。少し先には工場地帯があり、児童クラブの子どもたちと一緒にお菓子工場の見学に行ったこともありました。（ジュンコさん）

2 パーラー公民館にある「もの」

公民館の機能を兼ね備えるために必要なもの。
それはパラソルと黒板テーブルでした。

パラソル

沖縄の陽差しは強い！ 陽よけはとっても大事です。時折やってくるスコールからも守ってくれます。リゾート感のあるパラソルをまちなかで広げるととっても目立ちます。

黒板テーブル

テーブルに落書きができる！ 黒板でできたテーブルは子どもに大人気。大人も黒板を囲むとなぜか会話が弾みます。

担当者より

アーティストという職種は、何か足りないと思ったとき、自分の生活環境のなかで補おうとする力が長けているのかもしれません。すでにあるものを組み合わせて新しい機能や道具を生み出すことを「ブリコラージュ」といいますが、ものや情報にあふれた現代だからこそ、ブリコラージュ的な能力が大事ではないでしょうか。（小山田徹）

みんなが集まる場所をつくりたい！というアイデアを形にするため、居場所づくりのプロ、アーティストの小山田徹さんに相談しました。小山田さんから出た低い丸テーブルにパラソルを立てるアイデアは、隠れ家のようでつい近づきたくなる。（ジュンコさん）

ZINE KIOSK
（ジンキオスク）

地域情報が書かれたZINE（ジン）が集まる、移動式情報センター。

組み立ても片付けもそんなに難しくなくて、大人二人でできます。子どもたちも手伝ってくれるんですよ。黒板テーブルやZINE KIOSKは県内で活動しているアーティストにつくってもらいました。足は脚立でできていてユニーク。パーラー公民館は学校の倉庫に保管させてもらっています。（アヤさん）

3 パーラー公民館にいる「ひと」

パラソルとテーブルを用意したら、次に必要なものは……、人でした。公民館のスタッフと地域が協力してパーラー公民館を運営しています。

地域のキーパーソン

パーラー公民館の館長は、この地区で長年活動してきた上原美智子さん。自分たちの場所を自分たちでつくっていく。そこからいろいろなつながりが生まれます。

公民館のスタッフ

パーラー公民館は、スタッフが2人常駐しています。モットーは「何もしない」こと。

私たちが「何もしない」ことで「何もしなくてもいい」し、「何をしてもいい」場所になれる気がします。やることが決まっていないと、それぞれが好きなことをはじめる。スタッフは毎回話を聞いたり、遊んだり、写真を撮ったり、あちこちから呼ばれて大忙しでした。（ジュンコさん）

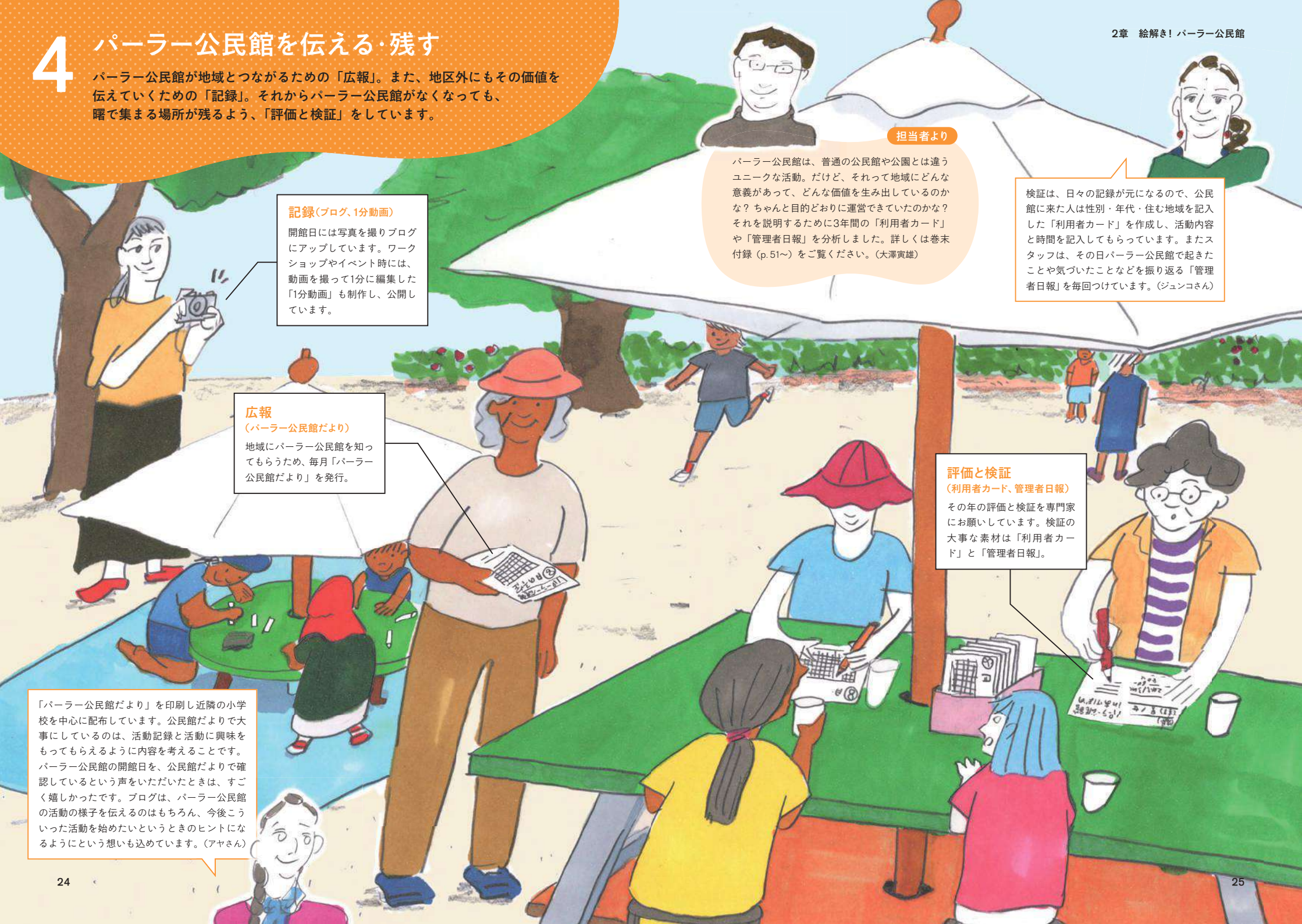
曙地区のパーラー公民館の館長・上原さんは「この地域に公民館をつくりたい！」と熱望していた一人でした。上原さんは、パーラー公民館を自分事として考えてくださる方です。そういう方がいる、というのはすごく大きいです。（アヤさん）

担当者より

「何もしない」と言っても、本当に何もしないのでは何も生まれません。世話焼きでサービス精神旺盛な人だからこそ、「何もしない」で聞き役に徹していると何気ない会話の中から様々なニーズに気づくことができるのです。地域の方の「やりたい」に気づき、後押しするために「何もしない」を心がけてもらいました。（宮城潤）

4 パーラー公民館を伝える・残す

パーラー公民館が地域とつながるための「広報」。また、地区外にもその価値を伝えていくための「記録」。それからパーラー公民館がなくなっても、曙で集まる場所が残るよう、「評価と検証」をしています。



担当者より

パーラー公民館は、普通の公民館や公園とは違うユニークな活動。だけど、それって地域にどんな意義があって、どんな価値を生み出しているのかな？ ちゃんと目的どおりに運営できていたのかな？ それを説明するために3年間の「利用者カード」や「管理者日報」を分析しました。詳しくは巻末付録（p.51～）をご覧ください。（大澤寅雄）

検証は、日々の記録が元になるので、公民館に来た人は性別・年代・住む地域を記入した「利用者カード」を作成し、活動内容と時間を記入してもらっています。またスタッフは、その日パーラー公民館で起きたことや気づいたことなどを振り返る「管理者日報」を毎回つけています。（ジュンコさん）

記録（ブログ、1分動画）

開館日には写真を撮りブログにアップしています。ワークショップやイベント時には、動画を撮って1分に編集した「1分動画」も制作し、公開しています。

広報
（パーラー公民館だより）

地域にパーラー公民館を知ってもらうため、毎月「パーラー公民館だより」を発行。

評価と検証
（利用者カード、管理者日報）

その年の評価と検証を専門家にお願いしています。検証の大事な素材は「利用者カード」と「管理者日報」。

「パーラー公民館だより」を印刷し近隣の小学校を中心に配布しています。公民館だよりで大事にしているのは、活動記録と活動に興味をもってもらえるように内容を考えることです。パーラー公民館の開館日を、公民館だよりで確認しているという声をいただいたときは、すごく嬉しかったです。ブログは、パーラー公民館の活動の様子を伝えるのはもちろん、今後こういった活動を始めたいというときのヒントになるようにという想いも込めています。（アヤさん）

担当者より

パーラー公民館のワークショップは地域を知ること、多様な人との出会いを促すこと、新たな視点を得ることを意識しています。ワークショップのあとは、何気ない日常の風景がちょっと違うものに見えてきます。だからこそ、普段の「何もしない」が生きてくるのです。（宮城潤）

ワークショップに参加したあと、パーラー公民館の常連になる人がけっこういます。人間関係をつくるツールとしても良くできていると思います。（ジュンコさん）

アーティストやアートNPOと協働で開発されたワークショップを月に1回程度実施していました。最初は「何をするのかわからないから参加しない」でしたが、「わからないけど参加してみよう」に変化したんです。ワークショップは、わからないことにチャレンジする機会でもあると思います。（アヤさん）

5 パーラー公民館のワークショップ

パーラー公民館にとって大事なワークショップとは？
マンガでこれまでのワークショップを紹介します。

WORKSHOP A

あちゃ〜ぬ地図ゆ

歴史を知って描く、明日の地図

NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）企画の「明日の地図よ」を沖縄版に開発したワークショップ。みんなでおしゃべりしながらまちを歩いたあと、「未来のまち」を想像して地図を描きます。曙地区は埋め立て地区なので、かつての海岸線をポイントにしてまちを歩きました。地図に漁船を描いた子は、お父さんが船乗りだそうです。

WORKSHOP
B

ご近所映画クラブ

みんなと協力して、3時間で映画をつくる!

映画を3時間でつくるワークショップ。シナリオづくりから小道具くり、撮影まですべての工程を加者で担います。remo［NPO人記録と表現とメディアのため組織］による指導で行いました短時間で映画をつくらなくてはらないので、連帯感や、普段は違う関係性が生まれるワーショップです。

WORKSHOP
C

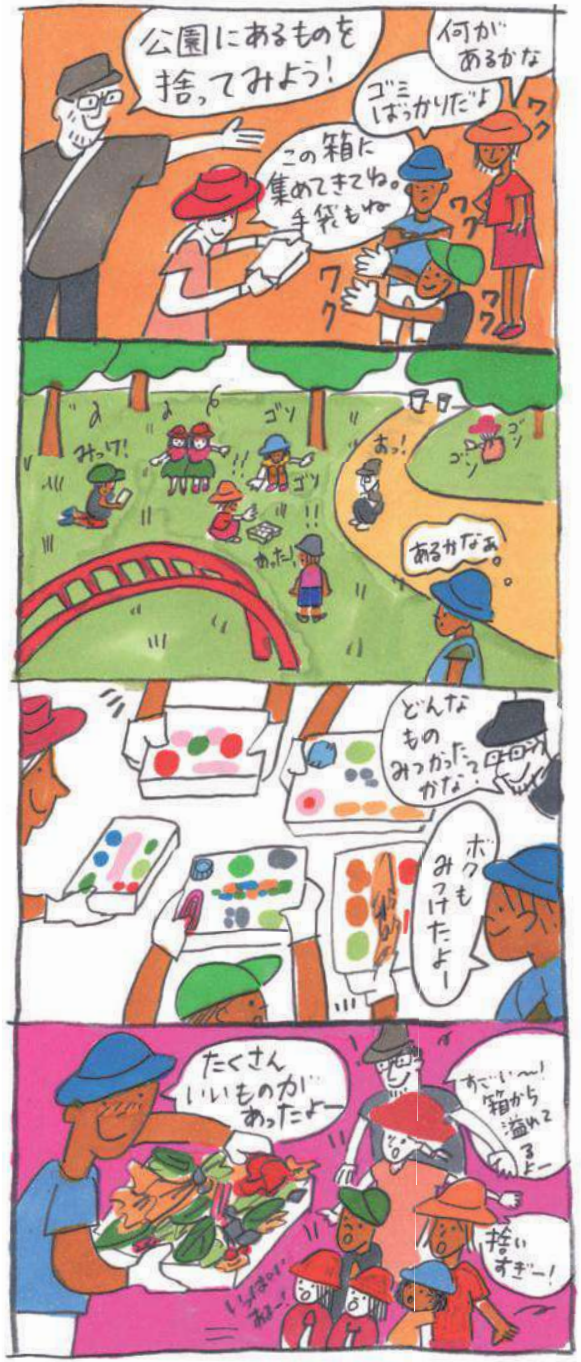
地域のZINEをつくろう！

地域の情報を発信するメディアとしてのZINE

「ZINE（ジン）」とは個人でつくる冊子のこと。ZING（ジング）を講師に開催したワークショップ「あけぼのZINEをつくろう！」以来、パーラー公民館ではZINEづくりのワークショップを何度も開催しています。地域で活動する人・団体などを紹介するZINEは、地域の情報を発信するメディアです。移動式情報センターZINE KIOSKで閲覧でき、情報拡散しています。

WORKSHOP
D

図鑑をつくろう！ 公園採集



夢中になって集めた、公園の魅力

小山田徹さんを講師に開催。あけぼの公園を散歩して、気になるもの、おもしろいもの、ふしぎなものを集めて、ケースに入れ、オリジナルの「図鑑」をつくります。花や葉、石、木の実などを拾っているうちに、見慣れた場所の魅力に気づくワークショップ。同じ場所で集めても、できた「図鑑」は十人十色。子どもも大人も夢中になって集めました。

WORKSHOP
E

地域のうたをつくろう！

みんなで考えた歌詞とメロディー

作曲家の鶴見幸代（つるみ・さちよ）さんによる、歌をつくるワークショップ。まず、曙のイメージを言葉にして歌詞をつくります。そして、黒板テーブルに書かれた五線譜に小石や葉っぱを置いてリズムをつけるとメロディーになりました。子どもから大人まで参加し、完成した「あけぼののうた」の最後の歌詞は「あけぼのの歴史つくらんといかん」でした。

曙1丁目自治会の「介護予防教室」に参加

「認知症カフェ」にてZINEワークショップ開催

地域の方がつくったZINEを集めた「ZINE KIOSK（ジン・キオスク）」を持って、情報をつなぐ！

おでかけ先では
活動に参加したり、
ただゆんたく（おしゃべり）したり、
ワークショップをしたり、
見学したり。

番外編

おでかけパーラー公民館

パーラー公民館は、あけぼの公園を飛び出して、
地域のさまざまな活動の場に出かけました。

みんながつくったZINE

イベント参加のお礼に郵便局へ

3章 公園にパラソルが広がるとき

パーラー公民館とはどんな場だったのだろう。
ご近所さんから遠くの研究者までパラソルの下に集った人たち、それぞれの視点から。

インタビュー

現場から見たパーラー公民館の「つどう」「まなぶ」「むすぶ」

佐藤純子＋平良亜弥［パーラー公民館スタッフ］
聞き手：大澤寅雄［ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室］

パーラー公民館がスタートした年から、評価・検証を担当する大澤寅雄さん。
管理者日報や来館者の利用者カードをとおしてその変化を見守る大澤さんが、
パーラー公民館にとっての公民館の機能を探る。
はじまりからスタッフを務める佐藤純子、平良亜弥にパーラー公民館の
「つどう」「まなぶ」「むすぶ」について、きいた。

確立した方法や技術ではなく、じわじわと「つどう」場所になっていく

――パーラー公民館にとっての「つどう」「まなぶ」「むすぶ」という公民館の3つの機能に沿ってお伺いしたいと思います。まずは「つどう」ですが、曙でパーラー公民館がスタートした2017年8月9日、管理者日報（以下、日報）には佐藤さんの記述で「無事にたくさんの方にオープニングレセプションに参加してもらった。その後の来館者はほとんどいなかったが……（略）……」とありました。その後の日報でも、子どもたちは通りがかるものの入りづらそうに去っていく様子が記録されていました。現在のように、子どもも大人も集まる場所になるまでの、経緯について教えてください。

佐藤純子（以下、佐藤）：当初、子どもたちはあけぼの公園に来ても、通り過ぎていました。上原館長が知っている子どもを見つけて「ちょっと、あなた～！」と呼びかけてもあまり寄ってくれませんでした。パーラー公民館が認知されるようになったのは、「ちょこっと☆ハロウィン」[*1]というイベントからです。その後は劇的に来館者が増えました。

平良亜弥（以下、平良）：最初は「この人誰？」という存在だったのが、「ねぇ」とか「先生」と呼ばれるようになりました。おもしろいのは、今はほとんどの子たちが「パーラー公民館の人」と呼ぶことです。先生とも親とも違う別の存在として「パーラー公民館の人」が加わったのかなと感じます。

――2年目から「おでかけパーラー公民館」（p. 32）が始まっています。これは、普段パーラー公民館では出会わない人のところに自ら出かけていくアウトリーチ活動ですよね。そこでも佐藤さんと平良さんは、関係づくりに苦心した印象が日報から伺えます。

佐藤：「おでかけパーラー公民館」では、こちらから出向いていくことによって関係ができていく感触はありました。小さな地域だけれど、必要な情報が届いていなかったりする。同じ地域だからといって、どこでも同じ感覚ではない。それを感じた機会でした。

平良：1年目、パーラー公民館の活動が一段落したあと、学校・地域・まちづくり・行政関係者が意見交換する場「曙と公民館について（ワクワクしながら）考える会」を設定しました。そこで、親世代の参加が少ないなど、広報についての課題があがってきました。パーラー公民館は、初年度からメディアで取り上げられたとはいえ、その存在を認知してもらえていない層はまだあると実感しました。と、同時に、子どもたちがあれだけ来館しているのに、家庭ではその話題が共有されていないのかなとも思いました。親世代の参画は、いろんな場面で難しさを感じるけれど、そこにとらわれすぎずに、できるだけいろんな場面で顔を出していくことで周知につながるのだという思いはありました。

――3年目になると緑ヶ丘公園（以下、緑ヶ丘）でもパーラー公民館が始まります[*2]が、2年間の経験が蓄積され、関係性を築いていく技術のようなものは獲得されたのでしょうか。緑ヶ丘の日報でも、最初のほうは「人はいるけれど交流できない」というのが残っていました。

佐藤：技術などは特にないんですよ。緑ヶ丘を始めたころ、児童館の目の前にパラソルを広げているのに、なかなか来てくれませんでした。緑ヶ丘公園はあけぼの公園と比べると住民も観光客も多い場所で、小さなコミュニティをつくりづらい印象がありました。それでも月に２回の開館を続けていたら、だんだんと関係性ができてきました。警戒心がとれてきたのだと思います。チラシを見て遊びに来てくれた親子もいました。

――「つどう」ための、場の熟成のノウハウがあるわけではないのですね。この場所になんども通い、顔を合わせることで、じわじわと集う場所になっているというか。椅子とテーブルがあるだけでも場は「熟成」されていく。初年度には上原館長が講座や昔話をするなどの活動[*3]もありましたよね。

佐藤：私たちは「何もしない」のが基本ですが、上原さんは昔の資料を持ってきてくれて、さまざまなお話を聞かせてくれたり、地域の方からお話を聞いてみたり、いろいろなことを始めました。

平良：パーラー公民館が主催するものとは別で、自主的な活動も生まれました。上原館長のご主人は近代琉球史に詳しく、「歴史講座」を3回ほど開催したことがあります。

公園では、「あそぶ」と「まなぶ」の境界線がない

——「まなぶ」という公民館の役割がありますが、パーラー公民館では、自発的な遊びから学びが生まれている印象をうけます。偶発的に子どもたちのなかから生まれる学びは、学校教育の学びとは質が違いますよね。

佐藤：遊びと学びの境界線がないのだと思います。子どもたちにとっては全部が遊び。でも、それが学びにつながっているんだなと感じることも、たびたびありました。そこに集まっているお年寄りから学ぶこともあるかもしれない。知らないことを知ったら、学びになるのですよね。

平良：公園なので、基本的に子どもたちは遊びに来ています。公園でワークショップを開催すると、子どもたちは遊びに夢中になっているときは来ないし、気になったら参加します。パーラー公民館は学校ではないので、子どもたちの反応はすごく正直です。また、遊びの場では、目的が学びになると、子どもたちは集中しません。学びを強制できないことを、子どもたちから学ばせてもらいました。

——一方で、ワークショップなどは、直接学びの機会につながると思います。参加者のアンケートをみると、内容を楽しむことと理解することでは、前者の満足度が高いようです。

佐藤：パーラー公民館で行っているワークショップは、好きな絵を描いていたら本になったり、適当にしゃべったら歌になったり、わからなくても参加できるし、達成感も得られるものが多いです。もう一つ大きな特徴は、人の関係性が変わることです。距離が近くなる。

——ワークショップは「習得する」よりも、新たな「気づきを得る」学びなのでしょう。なかでもパーラー公民館では、ZINE（ジン）づくりのワークショップ（p. 29）が重要な要素ではないかと思っています。ふらっとやってきて、黒板テーブルにお絵かきをすることが日常になっている子どもたちにとって、ZINEづくりはパーラー公民館と相性が良い気がします。

佐藤：子どもたちに「紙ある？」と聞かれて、わたしたちZINEをつくってくれたりする。

平良：通常開館での「何もしない」は、日常のなかでの気づきを大切にしているところがありますが、ワークショップではある種、非日常的な時間のなかで、新しい視点を提案する意味があるのだと思います。ZINEづくりは、シンプルな方法で年齢関係なく制作ができ、汎用性の高いワークショップです。なので、子どもたちも「自分のもの」にしている感じはあります。

物理的な壁がないことで、地域と「むすぶ」ことにつながる

——黒板テーブルにしても、ZINEにしても、自ら表現し、メディアをつくり出すことが自然発生的に起きているのが興味深いです。次に「むすぶ」について伺いたいのですが、地域の団体、例えば保育園、学校、図書館、包括支援センターなどの機関と、有機的につながっているのは、「むすぶ」の重要な要素ではないかと思います。つながれる要因はどのようなところにあるのでしょうか。

佐藤：たぶん、入りやすいんじゃないかと思います。ふらーっときて、座って、何もなければそのまま帰ることもできる。普通の公民館だと、ドアを開けて、受付があって、あいさつして、と。部屋に入って椅子に座ってもなんとなく工程が多くて距離がある。パーラー公民館は壁がないので、気づいたらいたりする人もいます。

——「気づいたらいたりする」っていいね（笑）。

平良：自分のタイミングで、できることをやれる、そういう自由度も要因の一つかなと思います。あとは、参加してみると「楽しい」というのもあるかもしれません。「面倒くさい」を超えるのは、「楽しい」だと思います。楽しいとちょっと面倒なことでも協力したいなと思えますし。楽しいことの積み重ねが、協力の輪の広がりにつながっているのではないでしょうか。

——建物としての壁や入口や受付がないので、物理的にも入りやすいですよね。

佐藤：遠目からパーラー公民館を見て「今日はやめようかな」とか「友だちがいるから行こうかな」とか自分のタイミングで判断できる。人が人を呼ぶというか、集まり始めると、さらに集まるなんてこともよくありました。

——日報のなかで「ちょこっと☆ハロウィン」でお世話になった沖縄銀行と郵便局にお礼のあいさつにいったら、その日のうちにパーラー公民館に来てくれた、と。「地域の企業はつながりを求めているのかもしれない」と書いていらっしゃいましたが、何のためのつながりだと感じられますか。

佐藤：あいさつしたその日のうちに、パーラー公民館の様子を見に来てくれました。興味がなかったらそのスピード感はないと思います。銀行や郵便局は、来る人を受け入れる立場ですし、新しい関係づくりを求めているのかもしれません。

——曙、緑ヶ丘で続けている「パーラー公民館だより」など、自分たちの発信が届いている実感はありますか。

佐藤：曙はパーラー公民館だよりを見なくてもいつやるのかがわかっていて[*4]、来てくれているのかもしれませんが、イベントやワークショップはチェックしてくれているようです。緑ヶ丘ではチラシを見て遊びに来てくれた親子がいました。緑ヶ丘は通常開館よりもワークショップの方が、反応が良かったです。

平良：たまたまショッピングセンターで、パーラー公民館の常連の子に会ったとき、お母さんとお話しする機会がありました。毎月のパーラー公民館だよりが届くと、開館日やワークショップ日をカレンダーにチェックしてくれていると教えてくれました。家庭のなかでパーラー公民館のことを話してくれていることが知れて、すごく嬉しかったです。

——マスメディアに取材を受けて発信されることもありますよね。そのことで変化などはありますか？

平良：マスメディアに取り上げられると、反響は大きいです。取材も増えますし、年々、外部からの視察が増えていることも波及効果としてあげられます。また、顔見知りの方から声をかけられることも増え、距離が縮まります。「よくわからない」から「信頼できる人たち」に変わるのかもしれません。

佐藤：パーラー公民館の設営や片付けなど手伝ってくれるようになるという嬉しい反応もありました。大きな変化でした。メディアに出ると、社会的な信用が生まれるのだと思います。それまで得体の知れない存在だった私たちも、少しは認めてもらえたのかなと。信頼のつくり方はいろいろです。

「公民館」と「パーラー公民館」の違いとは？

——一般的な公民館は、パーラー公民館と姿形が違います。公民館主事や社会教育主事などの資格を持つ職員がいて、講座をやっていたり、場所を貸してくれたり。そのほかの違いはどのようなところにありますか。

佐藤：パーラー公民館には決められた仕事がありません。黒板テーブルを出して、パラソルをたてるだけです。友人にも「その仕事って、公園で遊んでいるだけじゃない？」といわれたりしますね。

平良：「何もしなくていい」というのが大きな違いだと思います。

——そうはいっても、何もしないわけじゃないでしょ（笑）。

平良：そうですね。建物のある公民館は「何かをする」ことがいろいろ前提としてあると思います。通常開館では、私たちはパーラー公民館を設営すること以外は、基本的に「何もしない」から、スタッフも来館者も何か「やりたいこと」を自主的に見つけたり生み出していくことになるんだと思います。

佐藤：文房具などは用意していますが、だからといって私たちがそれで何かをさせるわけではありません。誰かが何かを始めると、それに反応したい、もっと楽しくしたいし盛り上がりたいという気持ちが生まれます。何もしていないからこそ、小さなアクションに敏感に反応できるのかもしれません。

——いわゆる「サービス」は提供していないかもしれないけれど、表情や行動を観察しながら、関係に変化をもたらすには何が必要か、どんなタイミングかを見極めている。観察し続けているのでしょうね。パーラー公民館の経験を、通常の公民館に還元できること、共有できる部分はありますか。

佐藤：例えば、たまには公民館で行われているサークル活動などを、職員が一緒に体験してもいいかもしれません。私たちも「おでかけパーラー公民館」（p. 32）で地域の取り組みに参加して、一緒に時間を共有することで関係性が変わった経験がありました。

平良：全公民館が年に1回でも、パーラー公民館をやってもいいかもしれません。建物の外と中では、見えてくるものが違うと思います。視点を変えてみることで、三つの機能についても、今までとは違う意味でとらえ直せるのではないかと考えます。

——最後にパーラー公民館らしさについて教えてください。お二人にとって、どんな場所ですか。

平良：人も活動内容も特定しないし、誰かがいることを認める雰囲気が自然にあるから安心できる場だと思います。曙は、自分自身にとっては、この3年間で気負わずいられる場になりました。

佐藤：それぞれが思い思いにすごしてよい場所。お互いにしがらみがないからこそ安心できる場所。曙のことは地元じゃないのに地元のように感じています。

［構成：佐藤恵美］

［注釈］

*1：毎年10月に行っているハロウィンのイベント。2017年、初めての開催をきっかけにパーラー公民館の来館者が増えたのは、楽しい体験ができる場所として印象づけられたことが大きいだろう。

*2：曙より3kmほど南にある緑ヶ丘公園で、2019年9〜12月に期間限定でパーラー公民館を開館。観光客も多い国際通り近くにある。公園内にある児童館と集会所を併設した公共施設「くもじ・にじいろ館」の倉庫に、パーラー公民館のパラソルや黒板テーブルなどの備品を保管している。

*3：自主的な活動として、上原さんのご主人・上原博さんが資料をもとに昔の話をする「歴史講座」を3回ほど不定期開催。これとは別に、地域の方をよんでインタビュー形式で昔の話を聞くことも何度かあった。

*4：その月の数字が付く日が開館日のため。

さとう・じゅんこ／パーラー公民館スタッフ、ダンサー、ダンス講師、絵画・造形講師。武蔵野美術大学卒業。2016年より公民館を利用した芸術文化推進事業という文句に誘われ、公民館に関わるようになる。2017年からパーラー公民館スタッフ。ものづくりが好きなのでワークショップが毎回楽しみでした。

たいら・あや／パーラー公民館スタッフ、現代美術家。1981年沖縄県那覇市生まれ。琉球大学卒業後、アートや教育について考えながら、アートイベントやワークショップなどの企画運営に携わる。2015年から社会教育のこともわからないまま、公民館事情を調査。2017年からパーラー公民館スタッフとして、地域のみなさんとあそびながらまなぶ3年間を満喫。

Report

パーラー公民館の体験レポート

**パーラー公民館は、各領域から注目を集める。
公民館、都市政策、アート、NPOなど、
さまざまな専門家が語るパーラー公民館の魅力とは。**

パーラー公民館が投げかけた新たな可能性

上村忠男［公益社団法人全国公民館連合会事務局長］

パーラー公民館を視察した時、今までに見たことのない公民館の姿に、大変な驚きと感動を覚えた。パラソルと机だけで、公民館を名乗るという大胆な発想はなかなかできなかったし、様々なリスクを考えると実現することも大きな挑戦だったに違いない。

公民館というと、施設を思い浮かべる人が多い。しかし、公民館は施設が充実していれば活動も充実するとは限らない。施設がないことを逆手に取り、公民館の機能だけで公民館をつくったという発想はすごい。パーラー公民館は、公民館が施設ではなく、「活動」があれば成り立つということを示した。パーラー公民館は昔の「移動公民館」で、その考え方は新しいものではないと言う人も多い。確かにそういう側面もあるが、「移動公民館」という枠組みだけで捉えてしまうと、実はパーラー公民館が内包している大切なことを見失っているように感じる。

パーラー公民館で何をしているのか。職員に聞くと「何もしないことがコンセプトだ」という。これにも驚かされた。確かに公民館職員は、自分たちで何かしなければならないという意識になりがちだった。しかし、パーラー公民館では意識的に何もしないことで、参加者が自分たちで何かを生んでいき、つくっていくことができるようになっていた。それは私たち全国公民館連合会が策定した「公民館のあるべき姿と今日的指標」で目指した究極の目的、「住民の自治能力の向上」にもつながる。公民館がなくても、住民自らが地域を動かし、よりよい地域をつくっていくことが公民館の真の目的ではなかったか。パーラー公民館の素晴らしさはそればかりではない。おしゃれで参加する人をわくわくさせるデザインや、活動をまめにSNSに投稿し、動画などで発信していることなども大きな魅力であった。パーラー公民館の活動には毎年驚かされることが多かった。活動は一区切りとなるが、次はどんなことで驚かしてくれるのだろうかと、これからも大いに期待している。

かみむら・ただお／大宮市小学校長、大宮市中学校長、大宮市教育委員会管理部学務課長、さいたま市教育委員会教職員課長、埼玉県南部教育事務所主席管理主事、埼玉県連合教育研究会長などを歴任。定年退職後、さいたま市教育委員会学校地域連携コーディネーターを務め、2014年4月から現職。

パーラー公民館は「アート」だ！

森 隆一郎［渚と 主宰／東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科特任助教］

「芸術」や「アート」と聞いて、思い浮かべることはなんでしょうか。名画や一流の音楽家による演奏、あるいは古典芸能。自然環境や建築物などの地域資源を活かした地域芸術祭などを訪れたことがある方は、ワークショップや体験が盛り込まれた参加型の作品を挙げるかもしれません。でも「アート」の最前線はもっと先にあります。2016年、文化芸術基本法が改訂されました。条文には、文化や芸術それ自体の振興とともに「観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない」とあります。この条文は、2000年ごろから文化や芸術が美術館や劇場だけでなく、まちなかや里山などを舞台に展開されたり、教育や福祉などの現場で実践されたりと、社会において果たしてきた実績や価値が認識され、その役割が明文化されたものです。明治維新以降、日本社会は経済効率を最優先してきました。その結果、ツケのように様々な場でタコツボ化が起こり、人間社会の発展を阻害しているように感じます。私は人間社会が本来持っている創造性を発揮し、総合力を回復する切り札が「アート」だと思っています。

2018年8月「パーラー公民館」を訪ねました。待ち構えていた子どもたちが率先して設営を手伝い、やりかけの作品づくりに取りかかり、子ども食堂の人がカレーライスを配り、図書館長はパラソルの下に移動図書館の箱を広げ、地域活動の担い手は小冊子（ZINE）が集められた「ZINE KIOSK」に最新版の活動紹介冊子を届けに現れる。まさにコミュニティのセンター（中心）が立ち現れていました。少し大げさですが、住民が自らの社会を形作る直接民主主義の片鱗すら感じました。現在、アートに求められていることのひとつは、既存の価値観を疑い、新たな次元で人と人をつなぎ、人間社会の可能性を切り拓くことにあります。その観点から眺めてみると、パーラー公民館は「アート」の最前線そのもののように感じられたのです。

もり・りゅういちろう／アートやカルチャーで社会をクリエイティブにすることをテーマに日々活動。週イチ早朝の文化雑談会「トーキョーアーツのれん会」主宰、観光案内所兼アートセンターshibuya-sanプログラムディレクター、全銀座会G2020アドバイザーほか。前・アーツカウンシル東京PRディレクター。

Photo:平間至

「越境」する社会教育、ここにあり

古賀桃子［NPO法人ふくおかNPOセンター代表］

ここ数年来、行政（国、地方自治体）を含む社会教育のステークホルダーは、「さまざまな人・組織との連携・協働をすすめ、豊かな学びと体験を通じた課題解決に貢献するべし！」という論調になっている。ただ、中間支援組織の立場で活動する筆者からは、正直なところ社会教育の現状は未だ「越境」感に満ちているとは言い難い。これに対し、パーラー公民館は以下3点で「越境」しきっていた。

一つは「イメージ」。公民館といえば、「館」の字の通り地域に長らく鎮座する古めかしい建物を連想しがちだが、あのおしゃれなパラソルの構造物でもって、万人が持っているであろう公民館への固定観念をスマートに越えていた。次に「プログラム」。「野外」「出入り自由」というユルい設定が奏効して、回を重ねるにつれテーマ・参加者とも広がりを見せていた。従来の社会教育によくありがちなフォーマルな手法（事前募集、講師による座学、グループワーク、満足度アンケート）にはない新境地に至っていた。最後は「エリア」。公民館をはじめとする社会教育施設では、担当するエリアを越えた取り組みはNGとされがちである。ただ、パーラー公民館は、「つどう・まなぶ・むすぶ」の機能をどこへでも出前できるため、公民館が徒歩圏内に無いエリアへアウトリーチする新たな手法を叶えた。

言わずもがな、「越境」はそれ自体が目的ではなく、あくまでやりたいこと・やるべきことを実践するための一つの手段である。他方、パーラー公民館は、企画段階から「越境」を念頭に進められてきており、ユニークな学び・体験の実践につながっていることはもちろん、越境しきれず自己完結志向が根強い社会教育界に対して、「もっともっと越えようよ！」と鼓舞するようなメッセージを投げかけているようにすら映った。パーラー公民館には、閉塞感すら帯びつつある社会教育の進むべき針路を見越した水先案内人として、さらなる実践と発信を期待したい。

こが・ももこ／1975年福岡県福岡市生まれ。学生時分まちづくりNPOを経て、2002年に現組織を設立。［草の根から、社会を描く。］を合言葉に、企業・行政・公民館・社会福祉協議会・児童館等の橋渡しや伴走支援を通じた、地域づくり・社会づくりの黒子に注力。また、『泡盛新聞』九州局長として、沖縄県の産業振興に向けた県産品PRボランティアにも注力中。

「まちを使い、まちを育てる」新たな公共施設への期待

金城 聡［那覇市都市みらい部都市計画課都市デザイン室室長］

那覇市は経済・文化・社会活動などが活発な都市だが、地域コミュニティの希薄化などの都市部特有の悩みも多く抱えている。暫（しばら）く緩やかに増加してきた人口も今後は減少に転じ、少子高齢化も進む見込みであることから、将来に渡って暮らし続けたい魅力的な都市づくりの取り組みを模索している。このような前提のもとに、都市政策のヒントとして、パーラー公民館の二つの効果に着目した。

一つ目は、施設総量や維持管理費の削減が求められている公共施設の多様な活用の視点だ。公園という身近な公共空間に魅力的な道具を配置して人を呼び込みつつ、多様な人財によるサポートと併せた活動で、新たなコミュニティ空間と時間を生み出した。公共施設の多様な活用という観点から既存施設を使い直したり、新たな施設を整備する際には、ハコモノではない生きた施設とすること、また多様な使い方を前提とした上で、時代の変化にも柔軟に対応できる余白があることが必要不可欠だと改めて気づかされた。二つ目は、活動の可視化によるにぎわいの波及である。近年、建物や公共空間の造りを工夫することで、行われる活動や生み出されるにぎわいを周辺に波及させる手法や取り組みが注目されている。実際に娘たちを連れて出掛けたパーラー公民館では、繰り広げられる日常の遊びや学び、ワークショップなどの取り組みが可視化され、施設のにぎわいが地域の魅力へと広がっていることを実感した。また、見られる側にも自然と地域への愛着が醸成されることが期待できると感じた。

地域や社会と繋がるウェルカムな雰囲気を都市の共通基盤とすることで、一人ひとりが地域やコミュニティの一員であることを認識し、都市や地域に愛着や誇りを持つことが、魅力的な都市づくりを支える大きな力となるはずだ。これまでの「まちを作る時代」には見落とされていた、「まちを使う視点」や「まちを育てる視点」をリアルに提供してくれたパーラー公民館の次の展開にも注目したい。

きんじょう・さとし／1999年沖縄県那覇市入庁。主に都市計画分野でのまちづくりや那覇文化芸術劇場なはーと（新市民会館）の建設事業をとおして、市民との協働によるまちづくりに取り組んでいる。都市計画・建築・交通・景観・コミュニティなど魅力あるまちづくり全般に興味津々。

パーラー公民館の1日体験

野嶋京登［浜松市富塚協働センター・コミュニティ担当職員］

「日本一の公民館に学ぶ」。この夏、そんなうたい文句に魅かれ、私は浜松市が企画した職員研修プログラムで若狭公民館に5日間滞在した。プログラムの一つがパーラー公民館の1日店長。沖縄を感じるその魅力的な名称は知っていたが、今回が初体験だった。

当日は快晴。午後2時の開始前から子どもたちが公園に集い楽しみに待つ。その光景はまるで紙芝居屋の周りに子どもたちが溢れかえっていた昭和時代にタイムスリップしたかのよう。隣の曙小学校の倉庫からパラソルを運び出そうとすると、子どもたちが率先して手伝ってくれ、その姿は、みんながこのパーラー公民館をワクワクしながら待っていることを物語っていた。

現場で衝撃を受けたのは、準備の最中「今日は何をするのですか」と尋ねた私に対し、「特に何もしないよ。集まった人で何かおもしろいことが始まるのがパーラー公民館の良さだよ」と宮城潤さんが言ったことだ。前もって決めるのが一般的だが、パーラー公民館では特にやることは決めないのだ。実際、特に大人がファシリテートしなくとも、集った子どもたちが、絵を描いたり、ゲームをしたり、みんながそれぞれ楽しんでいる。また一角では、大人と一緒に、手話ダンスの披露や太極拳の講座も行われ、楽しそうに過ごしている。ここでは、居場所づくりだけでなく、公民館の基本的な役割である「つどう・まなぶ・むすぶ」が機能していると感じた。そして、ここに集う一人ひとりが見せる笑顔から、地域コミュニティの原点も感じることができた。

パーラー公民館には建物にはない良さがある。建物の枠がないからこそ、人と人との触れ合いが無限に広がっていく。それはパラソルがつくり出す非日常的な空間が作用しているのかもしれない。研修を通じて、「まちづくり＝人づくり」「地域コミュニティの原点は人とのつながりである」ということを強く感じた。こんな場を浜松でもつくっていきたい。

のじま・きょうと／1985年静岡県浜松市生まれ。大学卒業後、化粧品メーカーでの営業職を経て2014年、浜松市役所へ入庁。入庁後、税務・企画政策・地域コミュニティの業務に従事。現在、コミュニティ担当職員として「親切・丁寧・笑顔」をモットーに地域に寄り添い、親しみやすい職員を心がけている。

Voice

地域から見た、パーラー公民館

曙でパーラー公民館が始まって以来、そのファンが地域に少しずつ増えていった。
日常的に利用する人たちにとって、パーラー公民館はどんなところだったのだろう。

地域に愛着を感じるきっかけに

玉代勢 藍 [たまよせ･あい／fish & chips まるたま]

私は近所で飲食店を営み、お店が暇なときなど、スタッフや近所の方とおしゃべりをしにパーラー公民館に立ち寄っています。また、小学生の子ども二人も、毎回とても楽しみにして通っています。家族で参加したZINEづくりのワークショップや野外映画会も良い思い出です。児童館や図書館など常設の公共施設がない曙で、パーラー公民館は唯一地域の方と気軽に集える場所。ワークショップやイベントは、参加をしてもしなくても、地域に活気を感じる機会でした。公園で遊ぶ子どもたちが、気が向くとスタッフやおばあちゃんたちと座っておしゃべりをしたり、移動図書館で本を読んだりする自由さが良く、パーラー公民館ならではの光景として印象に残っています。

今回、改めて施設のない地域のデメリットを感じつつも、常設が無理でも工夫次第で色々な公民館の可能性があると知りました。会場が建物内ではなく、普段子どもたちが遊ぶ公園だからこそオープンな雰囲気が生まれ、公民館は人が来るのを待つ「受け身」だけでなく、自ら必要とされる場所に「出向く」こともできるのですね。パーラー公民館ができ、人が集うあけぼの公園を、地域の中心だと感じるようになりました。数年前に引っ越して来たわが家は、そこでの出会いから地域の方に知ってもらえ、また私たちも顔や名前の分かる人が増え、この地域や暮らす人に愛着を感じるようになりました。

「箱物」がなくても、開放的な場に

吉田 修 [よしだ･おさむ／曙小学校区まちづくり協議会会長]

まちづくり協議会の一員として「パーラー公民館」の立ち上げから一緒に活動し、時々運営のお手伝いをさせてもらいました。正直最初に話を聞いたときは「パーラー公民館って何だろう？」と、雲をつかむような印象でした。曙に人の集まる場所がなく、ぜひ欲しいとの声が、若狭公民館の宮城潤館長に届いたようですが、「いきなり『箱物』の実現は難しいけれど、その方法のひとつとして、みんなが集まりその中で一緒に楽しみましょう」と言われ、全体像がつかめず何を期待していいか分かりませんでした。

しかしやってみると、子どもたちや地域の人たちが屋外でふれあう、遊ぶ、ゆんたく（おしゃべり）でつながる、この地域に今までにない開放的な場が実現できました。私自身、テーブルでの子どもたちとのゆんたくなど、とても楽しく過ごさせてもらいました。これまで拠点（公民館等）がないと地域活動ができないという前提で、公民館設置を要望してきました。しかし箱物がなくても、既存の施設（公園等）を利用して、人が集まるランドマーク（パラソル）を設定し、場所をつくれば、人が集まり、色々なことができる。発想の転換でできることはあると感じました。

目的のない、自由な活動を生む場所

仲程あや子［なかほど･あやこ／那覇市立若狭図書館館長］

来館の少ない曜の方々へ図書館をアピールするきっかけになればと思い、子どもたちの興味をひきそうな本50冊程を選書して、不定期ですが持っていくようになりました。貸出はせず、パーラー公民館で子どもたちと一緒に楽しむスタイルです。当初は、図書館の来館や貸出につながってほしいとの期待がありましたが、曜から距離があり、駐車場のない図書館まで足を運ぶことは難しいと感じるようになり、来館してもらうのではなく、こちらから出向いていくことで、利用者との距離が近しく、自由な活動をすることができたと感じています。

本を持っていくと、絵本よりも折り紙の本が人気で、いつの間にか折り紙教室になっていることも。自由研究の本をもとにシャボン玉づくりにチャレンジしたりと図書館ではなかなかできない自由な活動がとても楽しかったです。「公民館」は、利用者がサークルや講座など、明確な目的をもって利用するというイメージが強いのですが、建物がなく活動も自由なパーラー公民館は、目的がなくても「とりあえず行ってみて、面白そうなことがあればいいな」という正反対の「公民館」のイメージを与えてくれました。

パーラー公民館は、公園の利用マナーも変える

玉寄文代［たまよせ･ふみよ／子ども食堂ほのぼのカフェ、民生委員］

子どもから高齢者まで多世代の人がいっぱい集まるので、子どもたちへの差し入れ、また民生委員として、見守り活動や声がけをしに、都合がつく限り足を運びました。子どもたちが素直に自分を表現できている場所でした。パーラー公民館といえば、ワークショップ。「あけぼののうた」が生まれ、「図鑑をつくろう！ 公園採集」では地域を再発見し、参加者がつくった「ZINE」はひとつひとつが自己を表現し、どれもすばらしく地域を見直す機会になりました。イベントといえば、やっぱり「ちょこっと☆ハロウィン」です。年々お店や子どもが増え賑やかになり、仮装も本格的になって……、今年は大わらわで周りをみる余裕もなかったな。以前「オロナミンC」のCM撮影もあったね。テレビCMに映る当時の子どもたちを観て、近所の人たちが「あれからすごく成長したな」と感じているようです。

パーラー公民館で出会ったまちの人たちと、日常的なあいさつはもちろん、話題の共有もできるようになりました。また子どもたちの公園の利用マナーも変わりました。以前はゴミのポイ捨ては当たり前、拾ってきた物が放置されたり。今では片付けもし、また友だちと仲良く一緒に色々な作業をしたり、楽しい遊びを考える姿が見られます。そんなパーラー公民館に差し入れを届けることが、私の楽しみでした。

公民館は、辛いことや悲しいことを忘れる時間にもなる

安里尊之［あさと･たかゆき／那覇市地域包括支援センター安謝］

高齢者が住み慣れた地域で、いきいきと安心して暮らせるよう、介護サービス、福祉、医療などの面から支援を行っています。その中で居場所づくりは重要な課題。パーラー公民館は地域住民が様々につながり、特に高齢者が交流や憩える場として大変貴重です。訪れると誰もが元気をもらえ、地域を元気に、心豊かにできる「社会資源」だと感じました。また、私たちが主催する「認知症カフェ」にも、「おでかけパーラー公民館」として度々参加いただき、ZINEづくりワークショップを開催してもらいました。和気あいあいと和やかな雰囲気で、高齢者向けの地域情報をまとめたZINEを可愛くつくり、その後はZINE KIOSKで配布してもらっています。

個人的な思い出はワークショップ「ご近所映画クラブ」で人生初の映画制作に参加したこと。達成感がハンパナイ！　ちなみに配役は「カー」（からす）でした。とても楽しかったな～。これまで公民館は「利用する」というイメージがありましたが、それプラス、つながる場所、辛いことや悲しいことを忘れることのできる時間にもなると知りました。パーラー公民館は心の温もりを感じるそんな場所でした。

上：時々やってくる移動図書館（若狭図書館）の読み聞かせ／下：緑ヶ丘公園で開催した「フルムーン映写会」。野外上映会は曙小学校でも開催した

巻末付録

［評価検証報告］

教えて、寅さん！ パーラー公民館ってなんだったの？

**沖縄ではガジュマルの木に精霊が宿ると信じられています。
あけぼの公園にある大きなガジュマルの
精霊・パーラーちゃんは、子どもが大好き。
そんなパーラーちゃん、パーラー公民館がなくなるのが、
ちょっぴり寂しいみたい。パーラー公民館のことを、
評価検証の専門家・寅さんにあれこれ聞いてみました。**

構成：大澤寅雄

寅さん

本名、大澤寅雄（おおさわ・とらお）。文化を生態系として観察するさすらい人。祭りのあるところに出没するらしい。

パーラーちゃん

あけぼの公園にある大きなガジュマルの木の精霊。お腹が空くと不機嫌になる。

評価検証ってナニ？

パーラーちゃん：パーラー公民館では、評価検証にも取り組んでいたんだってね！ ところで、それってナニ？

寅さん：「評価」には、価値をお金に換算して査定することや、人物や物事の良し悪しや優劣の判断をするなんて意味もあるんだけど、私の場合は、活動の意義や価値を認めて世の中に広げていく、そういう意味の「評価」を大事にしているんだ。あと「検証」は、最初に仮説を立てて、実際にその仮説の通りに物事が進んだかを調べて証明することなんだ。

パーラーちゃん：なんだか、難しいなぁ。パーラー公民館では、どんな評価検証をしたの？

寅さん：難しく聞こえるけど、パーラー公民館の評価検証は、とてもシンプルなんだ。「パーラー公民館が、地域にどんな意義や価値があるか」「公民館の『つどう・まなぶ・むすぶ』という基本的な機能をどのように実現したか」を調べました。

その方法は、パーラー公民館を訪問した人に書いてもらう「利用者カード」と、スタッフの「管理者日報」、そして「アンケート」の三つ。どんな人が、どれくらい、どうやってパーラー公民館で過ごしたかを、3年分のデータから読み解きました。

パーラーちゃん：すごい！ 3年間もこっそり調査してたなんて！ そこから何が見えたの？

利用者カードから

寅さん：利用者カードをみると、おもしろいことがいっぱいわかったよ。

まず、開館時間が3年間でどう変わったか。最初の1年目は、期間中4.7日に1日の割合で、週2回開けていた時期もあった。2年目は9.5日に1日とペースダウンしたけど、通常開館以外にパーラー公民館が出前する「おでかけパーラー公民館」も始めた。3年目は7.0日に1日で、あけぼの公園に加えて緑ヶ丘公園でも新しくスタート。3年間で開館日数は74日間。

1年目の利用者数は112人、2年目は127人、3年目は少し減って104人。1年目からずっと利用してきた人もいるけど、実人数としては、3年間で、なんと！ 221人分のカードが集まって、延べ利用時間数は1,906時間になったんだ。

パーラーちゃん：えっ!? あけぼの公園にそんなに人が来ていたんだ……。

寅さん：そう。子どもからお年寄りまで、たくさんの人がパーラーちゃんの下に集まってくれたね。2年目に比べると3年目は利用者が減ったけど、数字には見えてこないような関わりが管理者日報から見えてくるんだよね。だから私は、数字だけで意義や価値を測りたくないんだ。

パーラーちゃん：みんなは何をしにパーラー公民館に来てたの？

寅さん：利用者カードには、みんなに「何時から何時までに何をしたか」を記録してもらっていたのね。活動内容を「休けい」「おしゃべり」「遊ぶ」「学ぶ」「教える」を色分けして、子どもたちも書きやすいように工夫したんだ。2年目と3年目には「遊ぶ」が6割で、それ以外は3割ぐらい。多くの子どもたちが遊びに来たことがわかります。でも1年目では「遊ぶ」は4割くらいだったから、時間とともに変化して「遊ぶ」割合が増えたんだね。

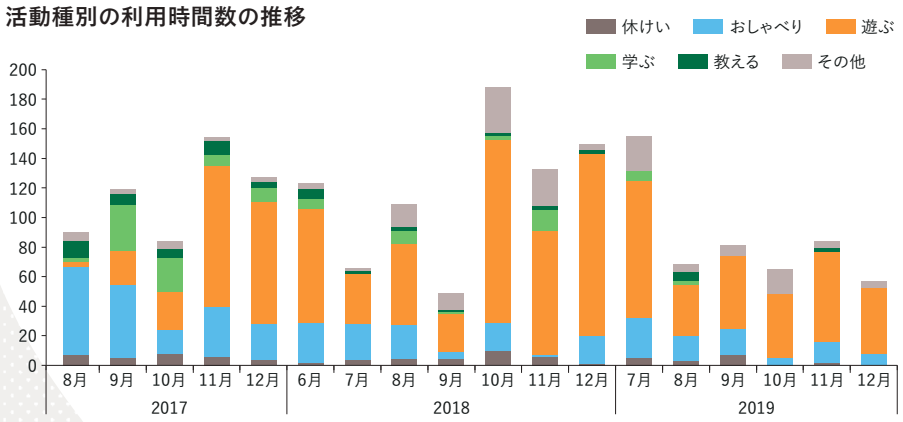
ワークショップをやったときのアンケートの自由記述には、子どもたちの居場所として定着してきたことを喜ぶ声や、地域の探索やまち歩きをやってみたい、ハロウィンやクリスマスパーティーといった恒例行事をやってほしいという要望も書いてくれたよ。

パーラーちゃん：パーラー公民館があることで、遊びやすくなったのかも。あけぼの公園の子どもたちは、自分たちで遊びを発明してるよね。遊びのなかから学んだり教えあったりしている姿をよく見かけるよ！ もう一つの管理者日報には何が書かれてたの？

管理者日報から

寅さん：3年目の2019年度の管理者日報から大事なことを四つにまとめると、一つめは、パーラー公民館が地域のコミュニティメディアになっていること。お年寄りの戦争体験を子どもたちが真剣に聞いたり、毎月発行する「パーラー公民館だより」を見て人が来てくれたり。みんながつくったZINE（手づくりの小冊子）を読みながら時

活動種別の利用時間数の推移



パーラー公民館の3年間のデータ

	2017年度	2018年度	2019年度
開館期間	135日間	199日間	168日間
開館日数	29日	21日	24日
開館頻度（開館期間に対する開館日数の割合）	4.7日	9.5日	7.0日
当該年度利用者数	112人	127人	104人
利用時間数	574時間	822時間	510時間

間を過ごすうちに、地域のいろんな活動が知られるようになったりしていたんだ。

二つめは、人と人とのつながりが広がっていること。多世代の利用者同士がお互い知り合いになっていくのはもちろんだし、ハロウィンイベントやおでかけパーラーを通じて、店舗や地元企業との関係も生まれました。

三つめは、あけぼの公園とその地域の特徴。2019年度は都心部の緑ヶ丘公園でもパーラー公民館を開館したけれど、あけぼの公園は3年間やってきたことで、パーラーを開く日は子どもたちが先に待ってくれていたり、準備を手伝ってくれるようになったんだ。

四つめは、なんといっても地域の方の協力です。パーラー公民館が始まる前のあけぼの公園にはたくさんゴミが散乱していたけど、3年間続けたらゴミの量が格段に減ったんだって。公園の清掃活動をしてくれている人がいるらしくて、そうした地域への影響は見逃せないと思うよ。

こんなふうに3年目の管理者日報はたくさんいいことが書いてあったんだけど、1年目は公園のゴミの問題を自分事として考える人は少なかったようだし、大人が集まっているときは子どもが中に入りづらそうな様子や、世代間の交流の雰囲気がうまくつくれなくて苦労していたみたいなんだ。

パーラーちゃん：そういえば、前は壊れた家電や家具が捨てられていたけど、いつの間にか見なくなったね！ 動物のフンも減ったし、子どもたちが駆け回って遊んでも心配ないよ！ 3年間で、いろんなつながりが生まれているんだね。

評価検証から見えたこと

寅さん：こうして3年間をデータとレポートで振り返ってみると、地域の変化も見えてくるよね。

では最後に、公民館の機能である「つどう・まなぶ・むすぶ」を、パーラー公民館がどのように果たしたのか、検証の結果をおしらせします！

パーラーちゃん：なんだかテストの結果発表みたいで、ドキドキする！

寅さん：発表します。パーラー公民館は、子どもたちが安心して遊べる場所を提供し、高齢者の集いの場所にもなりました。異なる世代が自然に交流を深めて、お互いに見守り合う関係に発展しました。ワークショップやイベントを通じて、地域の企業や民間団体、行政機関、学校など複数の機関が協働する機会も生まれました。また、パーラー公民館が全国的に注目されたことで、県外、海外からも視察が訪れ、普段は出会うことが少ない多様な人々と触れ合う機会にもなりました。

パーラーちゃん：パチパチパチ（拍手）

寅さん：この3年間の検証からわかったパーラー公民館の意義や価値を、地域に住む人たち自身にわかってほしいんです。公民館の「つどう・まなぶ・むすぶ」という三つの機能は何のために必要なのかといえば、地域の住民が、自分たちの住むまちを、より住み良い場所にするために、自分たち自身で行動できるようになるためなんだよね。それって公民館という建物がなきゃできないわけじゃないってことを、パーラー公民館が証明してくれたんじゃないかな。

パーラーちゃん：うん、なんとなくわかったよ！

パーラー公民館の活動記録 2017-2019

◉2017年度〈期間＝8月9日～12月22日〉

通常開館＝週2日
ワークショップ／イベント＝月1回
8月9日：オープニングイベント
8月16日、23日：WS「あちゃ～ぬ地図ゆ」（会場＝曙小／企画・監修＝NPO法人こえとことばとこころの部屋）
9月15日：WS「アルバム持ち寄りお茶会」
10月11日：WS「あけぼののうたをつくろう」（講師＝鶴見幸代）
10月30日：イベント「ちょこっと☆ハロウィン」（協力＝周辺店舗ほか）
11月7日：事前WS「ご近所映画クラブ」（会場＝若狭公民館／企画・指導＝remo〈NPO法人記録と表現とメディアのための組織〉）＊以下、remo
11月11日：WS「ご近所映画クラブ」（会場＝曙小／企画・指導＝remo）
11月13日：イベント「あけぼののうた おひろめ会」（会場＝曙小）
12月24日：トーク「公民館のあたらしいカタチvol.1」（会場＝若狭公民館／出演＝上田假奈代、宮城潤）
12月25日：イベント「あけぼの公園☆かんしゃ祭」
1月15日：イベント「曙と公民館について（ワクワクしながら）考える会」（会場＝曙小）
1月21日：報告会「パーラー公民館 大報告会」（会場＝若狭公民館／出演＝小山田徹、古賀桃子、大澤寅雄ほか）

［主な自主活動］

「歴史講座」（講師＝上原博）、「移動図書館」（主催＝若狭図書館）、「ゆんたく会」（主催＝上原美智子）など不定期開催。

◉2018年度〈期間＝6月6日～12月22日〉

通常開館＝月3日（14～18時）
ワークショップ／イベント＝月1回
5月23～24日：プレオープン／オロナミンCドリンクCM撮影（7月～、放送開始）
7月16日：WS「あけぼのZINEをつくろう!」（会場＝曙小／講師＝ZING〈ジング〉）
8月9日：WS「発見！探検！みんなのまち」工場見学とZINE WS（会場＝〈株〉ナンポー／共催＝曙児童クラブ）
8月28日：イベント「パーラー公民館リニューアル 移動式情報センター“ZINE KIOSK”お披露目会」（会場＝曙小）＊以降、パーラー公民館に常設
9月10日：おでかけパーラー公民館 始動　＊以降、不定期開催
9月16日：WS「ご近所映画クラブ」（会場＝曙小／企画・指導＝remo）
10月26日：イベント「うみそら上映会 in あけぼの」（会場＝曙小）
10月30日：イベント「ちょこっと☆ハロウィン」（協力＝周辺店舗ほか）
11月1日：「全国公民館研究集会」東京大会にてインターネット中継
12月22日：イベント「あけぼの公園☆かんしゃ祭」
12月26日：トーク「みんなで考える“公民館”のこと。」（会場＝くもじ・にじいろ館／ゲスト＝牧野篤）
12月27日：勉強会「モヤモヤ読書会」（会場＝若狭公民館／ゲスト＝牧野篤）
2月3日：報告会「パーラー公民館 大報告会」（会場＝若狭公民館／出演＝出野紀子、永田宏和、藤浩志、宮城潤ほか）

［おでかけパーラー公民館（訪問先など）］

「介護予防教室」（会場＝あけぼの園、曙1丁目自治会、あけぼの団地）、WS「みんなのZINEをつくろう！」（会場＝曙こども園）、WS「地域のZINEをつくろう！」（会場＝fish&chips まるたま／主催＝那覇市地域包括支援センター）、「ハロウィン」（主催＝曙こども園）

［主な自主活動］
「移動図書館」（主催＝若狭図書館）、WS「ガンシナー（鍋敷き）づくり」（講師＝宮里美律子）、「流しそうめん」（主催＝曙子ども食堂）など不定期開催

◉2019年度〈期間＝7月7日〜12月22日〉
通常開館＝月3日（14〜18時）
ワークショップ／イベント＝月1回
7月3日：イベント「キックオフミーティング」（会場＝曙小）
8月21日：WS「ご近所映画クラブ」（会場＝曙小／企画・指導＝remo）
8月25日：WS「あけぼの図鑑をつくろう！」（講師＝小山田徹）
9月19日：パーラー公民館地域スタッフ始動　＊以降、定期的に参加＝10月10日、11月21日、12月12日
9月27日：イベント「うみそら上映会」（会場＝曙小）
10月16日：WS「コマ撮りアニメーションをつくろう！」
10月30日：イベント「ちょこっと☆ハロウィン」（協力＝周辺店舗ほか）
12月1日：WS「さかさまBOX」（講師＝小山田徹）
12月22日：イベント「あけぼの公園☆かんしゃ祭」
1月18〜19日：報告会「パーラー公民館祭り！」（会場＝若狭公民館／出演＝上原耕生、西川勝、小山田徹、古賀桃子、牧野篤、大澤寅雄ほか）

［おでかけパーラー公民館（訪問先など）］
「ゆんたく会」（会場＝グッピー保育園）、「寺子屋」（会場＝曙小）、「手話ダンスサークル」（会場＝曙小）、「介護予防教室」（会場＝曙1丁目自治会、住吉自治会）、地域の企業や店舗にご挨拶（がじまるの樹の下で、沖縄銀行曙町支店、安謝郵便局）ほか

［主な自主活動］
「子ども食堂」（主催＝曙子ども食堂）、「移動図書館」（主催＝若狭図書館）、「紙芝居・唄三線」（主催＝上原美智子）など不定期開催。

◉他地域への展開など
［パーラー公民館 in 緑ヶ丘公園（期間＝19年9月10日〜12月20日）］
通常開館＝月2日（15〜18時）
ワークショップ／イベント＝月1回
8月17日：イベント「フルムーン上映会」＊パーラー公民館おひろめ
8月24日：WS「緑ヶ丘の図鑑をつくろう！」（講師＝小山田徹）
9月6日：おでかけパーラー公民館「くもじデイゴ会」（会場＝くもじ・にじいろ館）
10月22日：WS「みどりがおかZINEをつくろう！」
11月16日：WS「地域のうたをつくろう！」（講師＝鶴見幸代）
12月1日：WS「さかさまBOX」（講師＝小山田徹）

［おでかけパーラー公民館 in 石垣市］
18年10月21日：WS「みんなのZINEをつくろう！」（会場＝石垣市子どもセンター）
19年1月12日：WS「ご近所映画クラブin石垣」（企画・指導＝remo）、イベント「ほしぞら上映会」（会場＝まきらホッ！とステーション）
19年11月22日：イベント「ほしぞら上映会」（会場＝石垣市子どもセンター）
19年11月23日：WS「ご近所映画クラブ」（企画・指導＝remo）、イベント「ほしぞら上映会」（会場＝まきらホッ！とステーション）

＊以下にて略語を用いています
会場名なし＝あけぼの公園、曙小＝曙小学校、WS＝ワークショップ

ワークショップやイベントの詳細は以下をご覧ください。

パーラー公民館の日々を記録した「活動の様子」
https://cs-wakasa.com/program/archives/category/parlor/activity

パーラー公民館のつくり方を学べる「1分動画」集
https://cs-wakasa.com/program/archives/category/parlor/parlor-movie

移動式屋台型公民館「パーラー公民館」

企画	NPO法人地域サポートわかさ
館長	上原美智子
副館長	南信乃介
職員	佐藤純子、平良亜弥
用務員	宮城潤
設計・監修	小山田徹
制作	High Times、うえのいだ
支援	沖縄県、公益財団法人沖縄県文化振興会（平成29年、30年、31年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業）

https://cs-wakasa.com/kouminkan/project/parlor

パーラー公民館の3年間
2017–2019
2020年2月28日発行

発行・制作	NPO法人地域サポートわかさ
制作者	宮城潤、佐藤純子、平良亜弥
編集	坂田太郎、佐藤恵美
デザイン	山田和寛＋平山みな美［nipponia］
イラスト	友野可奈子（表紙、2章）
協力	NPO法人アートNPOリンク
支援	沖縄県、公益財団法人沖縄県文化振興会（平成31年度沖縄文化芸術を支える環境形成推進事業「移動式屋台型公民館を活用した地域住民主体の『つどう・まなぶ・むすぶ』創造拠点創出事業」）

©NPO法人地域サポートわかさ、2020
＊禁無断転載